

坂口満宏著 『日本人アメリカ移民史』

松田京子

一

近年の国民国家論の興隆の中で、国家に対する個人の帰属意識のあり方は、近代の歴史記述における中心的な考察対象として様々な問い直しが行われてきている。本書は、二〇世紀前半にアメリカ合衆国という日本の非勢力圏に渡った日本人移民社会のあり方に着目し、具体的にはシアトルを中心とするワシントン州の日本人社会に焦点をすえ、一方ではその実態的な解明に精力を注ぐとともに、他方でその実態的なあり方に規定され、また逆に次の展開を促していった日本人移民の社会意識の様相を、特に「国家と個人の同一化」という問題関心を軸に論じた労作である。本書は次のような構成と、内容からなっている。

はしがき

緒論 移民のアイデンティティと二つの国家

第一部 移民のナショナルリズムと社会的結びつき

第一章 日本人移民社会の形成

第二章 シアトルの日本語新聞

第三章 日本人会ネットワーク

第四章 日本人移民と「国語」教育

第二部 移民の定住戦略と二つの国家

第五章 北米における日本人農業の展開と定住戦略

第六章 外国人土地法との闘い

第七章 在米日本人の「二重国籍問題」解決運動

第八章 開戦前夜の在米日本人

あとがき

まず本書の冒頭におかれた緒論において、本書の問題意識と方法的立場、歴史記述の枠組が明確に提示されている。そこで緒論の内容をやや詳細に確認しておこう。

筆者の問題関心は明白である。送出国日本と受入国アメリカという二つの国民国家から常にまなざされる存在となっていた「移民」が、それぞれのまなざしにどのように対処したのかを、特に従来研究がタブー視されてきた一九三〇年代の日本人移民社会を中心に考察することによって、「国家と個人の同一化」という問題を考えることが本書を貫く主題である。このような主題に迫るために、筆者は次のような方法を提示する。まず日系社会のアイデンティティの問題を論じる際に繰り返し取り上げられてきた小説『ノー・ノー・ボーイ』に言及し、そこに描かれたアイデンティティのあり方に国民国家を相対化する可能性を見いだすとともに、そこに描かれた帰属意識の変遷にみる時代認識のあり方に、日本人移民社会の変遷を記述する際の重要性を見いだすのである。そしてそれぞれ象徴的な言葉で表現された時代認識には、時期を画する具体的な出来事が筆者によって提示され、歴史的な時期区分として本書全体を貫いていくことになる。すなわち

①移民社会形成開始期の一八九〇年代、第一次世界大戦開戦前後まで（「ニッポン人であることが平気だった」時代）、②第一次大戦を契機とする百%アメリカニズムの台頭期（一九三〇年初頭（半分だけニッポン人だった時代）、③「満州事変」勃発以降（「戦争」の時代）。

そして特に②期、③期における「移民」の帰属意識のあり方を論じるに際し、出身国日本に対する「忠誠心」(loyalty)と受入国アメリカに対する「忠誠心」(allegiance)という二つの「忠誠」観念を導入することによって、当該期の日本人移民のアイデンティティの特徴を二つの国民国家に対する「忠誠」の併存状態として把握し、それを定住戦略のモデルとして描くといった方法が示される。その上で、二つの「忠誠」の同時併存という一見矛盾する「国家と個人の同一化」のあり方に、国民国家の相対化の可能性を見るといった筆者の立場性が明瞭に語られている。このように緒論において示された三期の時期区分と、二つの「忠誠」という分析概念、そして日本人移民の定住戦略に国民国家を相対化する可能性を見るといふ立場性は、本書全体の分析と記述にも、一貫して通底するものである。

そこで、次では各章の内容に簡単に言及していこう。

二

四つの章から構成される本書の第一部は、先に述べた時期区分の主眼に①期、②期を対象として、ワシントン州に集ってきた日本人移民が、どのような形で相互に結びつきを強め、日本人移民社会を形成していくのかが論じられるとともに、複合的な「共属意識」がどのような回路を通じて、いかなる形態をとって創造されていくのかが論じら

れることとなる。

まず第一章では、シアトルにおける初期日本人移民の生活世界の様相が、「日本人街」ルポルタージュ記事などを駆使して生き生きと描かれるとともに、その社会的結合のあり方が、中核となった機関の変遷を軸に論じられていく。つまり初発の時期にあっては旅館や日本料理店がコミュニティの中核として機能していたが、やがて県人会や日本人会といった公共団体や、各種文化団体が組織され、それらの機構を中核とする強固な結合性をもった日本人社会が、「移民地」として形成されたとする。「移民地」とは、ホスト社会の文化との接点が少ない、また日々変化していく祖国の文化とも異なる固有の世界として定義されており、このようないわば自足的な日本人移民社会の性質は、第一次世界大戦前後まで一貫していたとされる。そしてそのような初期日本人社会のなかで社会的な結びつきを保証した有力なツールであり、かつ「共属意識」を醸成した媒体として、第二章ではシアトルで発行されていた日本語新聞が分析の対象として取り上げられ、そのあり方が日本人社会における勢力関係との関連で、実証的に論じられている。

また第三章では、日本人社会の社会的結合を制度的に保証した最有力団体として、日本人会が取り上げられ、その財政的基盤や組織機構の移り変わりが、①期から②期まで見通した形で論じられることとなる。ここでは地方日本人会―聯絡日本人会―太平洋沿岸日本人会協議会といった日本人会体制が構築されていく過程が述べられ、それぞれの役割と関係性が構造的に提示されるとともに、その日本人会体制と二つの国民国家との関係にも言及がなされている。特に、領事館業務

の一部代行により財政的援助を受けるといふ制度を通じて、日本政府・領事館の末端組織に組み入れられ、そのことによって逆に自らを権威化していくといった、日本人会と送出国日本との密接な関係性が指摘されている。しかし②期の排日運動の激化など、受入国アメリカの社会的状況に敏感に反応して、生活のアメリカ化を目指した「米化運動」の推進や、アメリカ政府に対する日本人移民の地位改善の要求など、定住に向けて日本政府とは一線を画した独自の戦略を率先して展開したのも日本人会が中心であり、その意味で北米とカナダに築かれた日本人会ネットワークは、日本人移民社会史を特徴づけるものとして、本書では高く評価されている。そして第一部の最後として第四章では、日本人会の一つの重要な事業であった日本人学校とそこでの〈国語〉教育の問題が、アメリカ社会の排日運動の状況と、それと密接に関連する日本人移民の定住戦略およびアイデンティティの変遷との関連で分析されている。特に第一次世界大戦後の百%アメリカニズムの台頭と排日運動の激化を受けて、アメリカの社会的状況に適應した教科書編纂という課題のもとに行われた『日本語読本』の編纂過程とその内容の分析から、筆者は「日系アメリカ人の父母」として、もしくは「在米日本人」として生きるといった「一世」のアイデンティティの変化と、定住戦略の定着を論じるのである。

このような第一部での議論を受けて、同じく四章から構成される第二部では、時期的には主に②期・③期が対象とされ、いわば定着期に入った日本人移民社会の動向と、そこで展開された権利獲得運動の推移が、受入国アメリカの社会的状況や送出国日本との結びつきなど重層的な観点から描かれていく。まず第五章では、一九〇〇年前後から

一九二〇年代半ばまでの日本人農業の状況を概観した上で、筆者は、当該期の日本人農業の進展要因を従来の研究では一般的な要因に帰してきたと批判し、日本人社会の具体像に分け入った考察から、耕作地域の県人別の住み分けや、金融や流通など様々な面にわたる共同組織の整備を、その推進要因として抽出するといった興味深い分析を行っている。まさに「ぎずな」や「われわれ意識」といった観点からの社会分析の重要性を提起してきた筆者の問題関心が、具体的な分析によって説得的に提示された章だといえるだろう。

また第五章を受けて第六章では、日本人農業の推移と日本人移民の定住戦略に決定的な影響を与えた外国人土地法の成立過程と、それに対する日本人移民の対応が、実証的に論じられていく。特に外国人土地法の違憲訴訟や帰化権訴訟、日米通商条約改正運動など、日本人移民による主体的な権利獲得運動は「自裁的態度」の発揚として評価される。そしてさらにこのような運動過程の中で、日本人移民が二つの国家をとくに相対化しつつ、二重の〈忠誠〉を生きるという定住戦略を、いかに主体的に選択していったのかという問題にも言及が及んでいる。そしてこのような問題関心は次章にも引き継がれる。

第七章では在米日本人による「二重国籍問題」解決運動に焦点が当てられるが、この問題は「国籍」によって個人の〈忠誠義務〉を単一の国家に収斂させようとする国家の論理の狭間で、日本人移民がいかに「自裁的態度」で自らの権利を守ろうとしたのかという問題として分析されることになる。具体的にはこの運動は、国籍離脱が困難な日本の国籍法を改正することによって、「二世」の二重国籍状態を解消し、アメリカ市民としての「二世」の権利（土地所有権を含めた権利

窓 であり、外国人士地法に対抗する最も有力な手段でもあった)を揺る

ぎないものにしよとする運動であったが、ここでは日本とアメリカ史を結んだこの運動の展開過程が詳述されるとともに、運動の達成にあたって、「一世」がもつ日本とのネットワークがいかに有効に機能したのかが説得的に語られており、ここでもまた、ネットワークを重視した分析の重要性が示されているといえよう。

そして本書の最後として、第八章では一九二〇年代末からの大不況といわゆる「戦争」の時代への突入による対日感情の悪化という状況の中で、日本人移民が一方で遠隔地ナショナルリストとして、献金、慰問袋の送付など祖国日本への「忠誠」を積極的に表すとともに、他方でニューディール政策への全面的賛同など受入国アメリカに対する百%の「忠誠」を表明する様相が具体的に描かれていく。その意味でこれまで本書で繰り返し述べられてきた「在米日本人」としての定住戦略と、二重の「忠誠」という問題が、「国家と個人の同一化」が最も求められる戦争という状況の中で、どのように展開していくのかが、最終章のまさに主題となっているといえるだろう。そして二重の「忠誠」というあり方は、日米の国家間の関係が悪化していく中で、その保持が困難になっていき、日米開戦とそれを受けた一九四二年二月の日本人・日系人の強制立ち退き命令によって、定住戦略は破綻するという歴史過程が描かれる。このような歴史的経緯をたどった後で、筆者は「国家と個人の同一化」という問題が持つ暴力性もしくは国民国家が持つ暴力性を、「在米日本人」の「忠誠」をめぐる問題にそくして、次のような指摘して本書を閉じている。

「出移民」であり、かつ「入移民」として二種類の規律を受け入

れ、体現しなければならなかった在米日本人最大のジレンマは、日本への「忠誠」とアメリカへの「忠誠」を同時に表明しなければならなかったことではなく、どちらか一方のみへの「忠誠」表明を求められたことであった。(本書三二二頁)

三

このような内容を持つ本書の特徴は、いかなる点にあるといえるだろうか。ここでは、本書の特徴と若干の問題点を指摘して、書評の責にかえたい。

すでに触れてきたように、本書の研究史上に占める特徴の一つは、研究の空白期であった一九三〇年代を分析の対象として組み込み、そのことによって、いわばコミュニティとしての日本人移民社会の変遷を、その生成期から一九四二年の強制移住による暴力的破綻まで一貫して描き切ったことにあるといえるだろう。この第一の特徴と深く関連して、本書の第二の特徴は、日本人移民社会を描く際の極めて自覚的なその方法にあるといえる。日本人移民を所与の社会集団として捉えるのではなく、個人として移住した人々が「へきすな」や「へしがらみ」を媒介として、いかなる社会的結合を遂げ、新たな社会集団として立ち現れるのかを問おうとするその方法的立場は、二宮宏之氏らを中心に提唱された「ソシアビリティの歴史学」^⑧を強く意識したものと見えるだろう。すでに繰り返し述べてきたように、このような方法に基づくことによって、日本人移民社会を平板な一枚岩的な社会として描くといった陥穽から脱し、その内部に地縁共同体を基礎とする小集団が一定の自立性をもって存在する重層的な集団として描き出すと

もに、日本人会をはじめとした諸機関を通じてネットワークが多層的に張り巡らされた機能的な社会集団として、日本人社会を生き生きと描くことに成功しているといえる。このことは「移民」を単なる労働力移動の問題として push 要因—pull 要因からのみ説明し切ろうとする経済至上主義的な観点、もしくは「移民」を外交問題として把握し外交交渉過程のみ注視する政治至上主義的な観点をともに批判し、生活主体としての「移民」を研究の出発点とするといった今日的な研究動向を先取りする方法であるともいえる。^⑧

そしてこのようにいわば日本人移民の社会史的 분석を、政治的な動向に関連づけて論じる視点として、国家に対する〈忠誠〉という認識のレベルが一貫して問題とされている点、これが本書の第三の特徴である。「想像の政治共同体」というベネディクト・アンダーソンの「国民」意識に関する議論を援用しつつ、祖国日本を離れたアメリカにあって、「日本国民」というナショナル・アイデンティティがいかに保持され補強されていくのか、またアメリカでの生活のなかで、受入国アメリカに対する〈忠誠心〉がいかに醸成されていくのかが丹念に描かれるその記述は、一方ではソニア・ビリティの歴史学が唱える〈へこころ〉のレベルへの着目の成果であるとともに、他方では国民国家の相対化という現代の政治的状況が要求する課題への、筆者の誠実な関心を表しているといえよう。その意味で緒論の最後に引用されている禅僧佐々木指月の言葉とその分析は、筆者の鋭敏な問題関心が具体的な資料と出会った結果として非常に印象深いものであり、白眉の記述として何度も繰り返し読まれるべきものだと考える。

以上のように本書の成果は大きいが、若干の問題点も感じられる。

まずは編集の問題として、基本的には既発表論文によって各章が構成されているため、やや記述に重複が多い点が気になった。重複部分を削り、各章を構成し直して、終章を補足するなど、単著としての編集を大胆に行った方が、論旨がより明確になったのではないかと思われる。

次に問題構成について。一つ目は、アメリカにおける移民諸集団もしくは社会的マイノリティの中での日本人移民の位置について、本書では、フィリピン労働者との関係性が若干言及されるにとどまっております、その点で物足りなさを感じた。他のアジア系移民や社会的マイノリティとしての「黒人」との関係に関して、実際に日常生活の場面でどれほどの接点があったのかという問題は、一方で重要な論点である。だが他方では具体的な接点のある無しに関わらず、特に社会的なポジションに関する認識やアイデンティティのあり方を問題とする場合には、競合関係に位置づけられざるを得ない他のマイノリティ集団に対する日本人移民の意識や対処のあり方は、欠かすことのできない重要な論点として浮上するのではないかと考えられる。また、本書では「一世」および「二世」のアメリカ社会での定住志向が力強く描かれているが、近年の研究のなかで、「帰国」や日本の勢力圏（植民地や「満州」など）への再移住といった営みを、日本人移民の「越境性」として重視する研究が見られる。^⑨ そのような研究動向に対して、本書はどのようなスタンスをとるのであろうか。その点が、やや不明確であると思われる。

さて、ここで述べた二つの疑問点は、「帝国」日本からの移民というその国際関係上の位置を、どのように研究に組み込もうとしている

窓のかという問いに、ともに端を発している。日本「帝国」の時代の、日本「内地」からの人の移動は、日本の勢力圏への移住がその大きな部分を占めていた。日本「帝国」内の人の流れと日本の非勢力圏への人の流れが、それぞれのような特徴を持ちながら、どのような関連を取り結ぶのかは、今後の重要な研究課題の一つであると思われる。

その意味で、「帝国」日本からの移民という観点から、アメリカへの日本人移民のあり方をさらに追求する必要性を感じるのだが、この点は本書の問題点というよりは、著者の次作への期待として言及してきたい。

以上、本書の特徴と若干の問題点を縷々述べてきたが、評者の理解不足から的是な論評や、筆者の意図に反した点に言及しているかもしれない。御寛容いただきたい。

最後に、この書評執筆中の二〇〇二年十月、朝鮮民主主義人民共和国による拉致被害者の「帰国」が、マスメディアで大々的に取り上げられている。その報道の渦の中であって、一方で拉致被害者に対して一つの国家に対する「忠誠」が求められる様を垣間見るとともに、他方で在日朝鮮人への「いやがらせ」が繰り返される様を聞くにつけ、本書が問い直しを試みた「国家と個人の同一化」という問題が、背景とする時代や出来事の位相を異にしながらも、現在進行形の問題として今なお切実であることを痛感した。その意味で、良質な歴史書という位置づけを越えて、今日的な課題に対する問題解決の糸口を探るためにも、本書は幅広く読まれるべき著作であるといえよう。

註

① 例えば、酒井直樹「偏在する国家―二つの否定『ノー・ノー・ポイ』

を読む―」（『死産される日本語・日本人―「日本」の歴史―地政的配置』、新曜社、一九九六年）など。

② 二宮宏之「歴史学再考―生活世界から権力秩序へ―」（日本エディターズスクール出版部、一九九四年）など。

③ 近年の研究動向については貴堂嘉之「アメリカ移民史研究の現在」（『歴史評論』第六二五号、二〇〇二年）などを参照。

④ 例えば米山祐「『日系アメリカ人』の創造―在米者（在米日本人）の越境と帰属」（西川長夫他編『20世紀をいかに越えるか―多言語・多文化主義を手がかりにして―』、平凡社、二〇〇〇年）など。

（二〇〇一年一月 東京 不二出版
三三三頁＋索引七頁 六五〇〇円）